

ヨーロッパ・ ハイライフ

青春のロンドン、フィレンツェ

斎藤漣奈子

Minako Saito



中公文庫



中公文庫

ヨーロッパ・ハイライフ 青春^{せいしゆん}のロンドン、フィレンツェ

定価はカバーに表示してあります。

1994年11月18日初版

1999年4月10日再版

著者 ^{さいとう みなこ} 斎藤 滯奈子

発行者 中村 仁

発行所 中央公論新社 〒104-8320 東京都中央区京橋 2-8-7

TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部) 振替 00120-5-104508

©1994 CHUOKORON-SHINSHA, INC. / Minako Saito

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-202182-0 C1195

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

ヨーロピアン・ハイライフ

青春のロンドン、フィレンツェ

斎藤渥奈子



中央公論新社

目次

はじめに

9

1 小さな芽ばえ

12

2 チェルシーの夏の終り

24

3 女友達

33

4 カレッジの午後

45

5 ロールス・ロイスの日々

52

6 ソニアとヴィリーとらくだの王子

65

7 たいくつな夜

85

8 カジノの夜景

99

9 ボーイズ・イン・ロンドン

115

10 グッバイ・ティーン

125

11 自分を探して

142

12 寒いお話

152

13 テヘラン珍道中

157

14 イタリア大好き

183

15 運転免許の話

16 ハンティングと栗の声

17 シャンパン島とうつぼ島

18 ラ・ファミリア

あとがき

195

215

230

275

286

ヨーロッパ・ハイライフ

——青春のロンドン、フィレンツェ

はじめに

一九七四年の春の日に、私はイギリスに向かって飛び立ちました。重いスニーカーと不安な心でロンドンのヒースロー空港に降り立った私は、大好きな黒くて大きなロンドン・タクシーに乗りこんで、キングス・ロードにあるチェルシー・カレッジに向かいました。めざすカレッジの寄宿舎玄関までは、階段を何段か降りていかなければならず、石のように重たいスニーカーと、両手に持ったバッグを前に、タクシーから降りた私はしばらく建物の前で、茫然としていたのがきのうのことのように思い出されます。

寄宿舎ではシャワー室は共同で、バスタブはひとつもなく、私は生まれてはじめて、全身に鳥肌を立てながらシャンプーをしなければならぬという経験を味わったり、キヤンティーン（学生の食堂）で出される、まるでゴムのように固いチキン・ソテーとス

トロベリー・ジャムのお料理を味わったり、授業がつまらないと、はっきりと教授に、「あなたの授業はつまらない」と発言する生徒がいたり、日本では知らなかったことの数々に開眼したのが、このロンドンでの二年間のような気がします。

その後イタリアに移ってから、まず私をおそったのが、言葉の問題でした。英語ができれば何でも通用すると信じていた私が、実際そこで生活していくためには、とにかく現地の言葉をマスターしなければ何も始まらないということを知ったのは、イタリアではイタリア語を話せないと仲間はずれになったような気持ちになるからでした。イタリア人は、とにかく多くのヨーロッパ人がそうであるのと同じく、とても議論好きの国民です。顔を合わせればすぐ議論が始まり、内容は天気のことには始まって、たいがい政治に移っていくので、この議論についていきたい一心で、頑張って政治の勉強もしたり、とてもめまぐるしく日々を過しました。

イタリアでは日本のように、女同士で食事（特にディナー）に行くことは、ちょっと珍しく、九十%がカップルで行くか、男女混合のグループで、普段映画やカフェに行ったりする時も、男女の単位で行動するのですが、そんな時も、すぐに話は政治のことになってしまい、たいがいの女性はただ貝の如く静かになるのですが、私は、ただファッションやメイクの話を女友達としているだけでは満足できなかったのです。フィレンツ

エは、歴史の古い街ですし、ルネッサンス美術を学ぶには、最適の場所でした。ポンテ・ヴェッキオを見おろす私の家から、ボッティチェッリの描いた、あの有名な「ヴィーナスの誕生」のある、ウフィッツィ美術館まで歩いて三分という、今、考えてもまた戻りたくなくなるような場所での生活は、ヨーロッパを深く理解するために、毎日ムダなく使われたと信じています。

イギリスではまだ、そのゆとりがなかったのかも知れませんが、イタリアに移ってからは、キリスト教の歴史や、ヨーロッパの歴史のひとつひとつを、心から学びたいという欲求が起こったのも不思議でしたが、八年間という長い間、私を魅了することになったイタリアは、これからも私の心の中にはじめての頃と同様の強烈なエネルギーを、注ぎつづけてくれることでしょう。

1 小さな芽ばえ

アルバムを開いて、小学校入学の日の記念写真を眺めるたびに、私ひとりが他の子達とはちがっているのに気づかずにはいられない。そのちがいの第一は、最後の列のまん中にいる私は、左右のクラスメイトよりもはるかに背が高く、体もひとまわり大きく、クラスメイト達が、いかにも小学校一年生という感じであわいらしいのにくらべ、私だけが上級生がまぎれこんだみたいなおどろきで写っていることだ。そして、第二は、他の生徒達がきちんとセーラー服を着ているのに、私はネービー・ジャケット風の服を着ているのだった。入学式のために母がオーダーしておいたイートン校のユニフォームがそれで、かわいらしいセーラー服姿の中で、私のイートンは、トラッドな大人っぽい匂いをさせていた。

子供心にも、その“イートン”という言葉のひびきに、何かあこがれを感じて胸をはってそのユニフォームを着て出かけたのを覚えてゐる。そして、“イートン校”のあるイギリスという国を意識したのは、絶対この時にちがいないと確信している。

英語にはじめて接したのがいつの頃だったかは、はっきり覚えていない。父と母は、家にいる時、英語と日本語で話をしていたから、そのまま、それらの英語のフレーズを言葉として覚えて育っていた私は、大人になれば英語は自然に話せるものだと思っていた。日曜日の朝になると、家族そろって英語のゲームをして遊んだ。それは、兄と私が父と母のベッドルームに行き、兄は父のとなり、私は母のとなりにパジャマのまますべりこむ。父と兄、母と私のペアに別れ、横になったまま、父は兄に、母は私に、いろいろな英語のフレーズを教え、兄と私は英語で会話をしていくという遊びだった。兄と私は、父と母が次々と教えてくれる英語を、スラスラと、ただオウム返しにくり返して会話をするわけだが、これが楽しくてしかたなく、いつでも日曜日の朝が待ち遠しかった。今でこそ、子供のための英会話のテープとか立派な教材の数々が簡単に手に入るが、私が小さかった頃は、特別これといったものもなかったもので、父の会社で出していたペンマンシップでスペルと筆体の勉強をしたり、中学生用のテキストを使ったり、英語をとってもおもしろい遊び、としてとらえていたように思える。環境が自然に英語を身近なもの

にしてくれたことが、私を将来外国に結びつける大きな導線となったことは事実だろう。父は、専門はイタリア語で、母と結婚する少し前までは、外語大でイタリア語を教えていたが、その後事業をおこし、英文の本や、英語のテキスト教材、テストなどを出版する会社を経営していた。母は独身時代から絵を描いていて、私が物心ついた時から、家には油絵具のにおいがしていた。私は幼い時からよく母のモデルになって、おとなしくポーズをとったことを覚えている。小学校最後の年に、母が祖父のために、大きな私の肖像画を描いてプレゼントした作品は、今でも私の大好きな宝物になっている。

中学に上る頃になると、ジュニアの英字新聞を愛読することから始めて、古典物、たとえばシェイクスピアのショート・ストーリーなどをどんどん読むようになっていた。ラジオはFENしか聴かなくなり、リンガフォンのテープも使いはじめた。私の通っていたのは、カトリック系の女学校で、英語には特に力を入れていたところだったこともあって、普通には大学生レベルのものと考えられるむずかしい教材をこなしていくことも必要だったし、好きだとか嫌いだとかという選択の余地もない状態で、英語漬けにされていったのかも知れない。

その頃、テレビでは、パートリッジ・ファミリーや「モンキーズ」やボビー・シャーマンの番組などが流行っていて、私はデヴィッド・キャシディーに、そして、親友の

ヒロミはボビー・シャーマンに、ファンレターを書いたり、英語をプライベートな興味の方にも使っていた。ヒロミとは、学校から帰るバスや電車の中では、まったく日本語を使わないで、英語だけで話することが常となっていた。ヒロミも私も、耳と運動神経がよいせいか、発音がよかったので、同じ乗り物に乗りあわせた人達は、私達のことを、外国育ちの女の子の子と思っていたらしく、時おり英語で話しかけてくる人も登場したりして、おもしろいエピソードがいっぱいある。

中学三年になると、高校にはエスカレーター式に進める建て前であっても、周囲には、進学の雰囲気がただよいはじめてきた。そして、ある日の午後、私は担任の先生から、校長様（シスターで、校長先生である方をこう呼んでいた）のお部屋まで行くようにいわれた。私達のいた学校では、校長様といえば、マリア様に一番近い方とか絶大な威厳と尊敬のシンボルの存在で、めったに口をきいたり、個人的に接していただくことができない方であった。私は、その校長様が、私にお会いになりたいということを聞いて、少しばかり緊張しながら、校長室のドアをたたいた。

校長室のドアをあけると窓を背に、やわらかい光の中に、校長様が私を笑顔で待っていた。

「あなたのことは、T先生からよく聞いていました。とても活発でいらっしゃることや、